だれが「本」を殺すのか〈ｐａｒｔ－２（延長戦）〉.pdf - Adobe Acrobat Reader DC

ほうが断然魅力的でした。それはクロネコヤマトのブックサービスの方々、それから、ビジネスライクすぎる面はあるけれども、セブン-イレブンの鈴木敏文の切れ味のすごさですね。そういった出版を非常に突き放して見ている人のほうが、実は出版の将来のことをよく考えている。そんなパラドックスを、肌で感じました。

出版の世界のなかに長くいると、どうしても硬直してしまう、目が見えなくなる。出版の方ばかり向いて、本を買う読者、あるいはそれを売る店員さんのことを、ほんとに考えていないのではないか、そんな気がします。

書くに値しない時代か？

ちょっと話を変えます。最近、ある雑誌から、いま教科書問題が話題になっていますので、日本の近現代史について書かれたもので、心に残った本、高校生から上、サラリーマンにも勧められる本を五つ選んでくださいというアンケートが来ました。そのとき僕が選んだ五冊はこういうものでした。

一つは『逝きし世の面影』、これは九州・博多の地方出版社である葦書房から出ている大変いい本です。著者は渡辺京二という人です。「日本近代素描」という連作の第一巻で、あとがきに石原莞爾の言葉が引かれています。「昭和の意味を問うなら、開国の意味を問わなければならない。極東軍事裁判の証人第一号として、ペリーを呼べ」という有名な言葉です。渡辺京二は、その言葉に

自分の思いを重ね、幕末から明治期にかけて海外から来た人々の日記を渉猟しながら、近代以前の日本はどういう文化を持っていたか、それがどういう形で西欧文明に滅ぼされていったのかということを追究した、大変な労作です。これが一冊。

それから、中公新書の山室信一の『キメラ――満洲国の肖像』です。満州帝国を大変的確にえぐった、入門書としては最適なものだと思います。

もう一つは、みすず書房から刊行されている末松太平の『私の昭和史』。これは二・二六事件の中心人物であった人間が、一切の自己弁護もせずに、ほんとに何の虚実もまじえずに淡々と、達意の文章で書いてある心に残る一冊でした。

それから大岡昇平の『レイテ戦記』（中公文庫）ですね。これはいうまでもなく、日本の戦争文学の金字塔です。昭和文学のなかでも最高峰に位置する作品です。

最後の一冊が、私がいつも引きあいに出す宮本常一の『忘れられた日本人』（岩波文庫）です。歴史の本というのは、概して英雄や歴史上の人物、日のあたる場所にいた人、いってみれば権力の側の人、そういった人にスポットをあてることがほとんどなのですが、この『忘れられた日本人』は違います。これまでだれも取り扱おうとはしなかった、いわば歴史に埋もれた庶民、その庶民の話にじっくりと耳をかたむけた聞き書きです。土佐山中の盲目の元博労であるとか、対馬に渡った開拓漁民とか、そういう人びとの話を淡々と書いている。それは日本の高度経済成長以前のありのままの姿でもある。われわれは健忘症ですから、少し前のことは、だれもおぼえていない。高度経

だから人は本を読む.pdf - Adobe Acrobat Reader DC

誕生している。一人ひとりを説明しないが、彼らは寺子屋に象徴される江戸の市民文化や和漢籍に親しみ、その基礎体力の上に西洋の文明文化を重ねたハイブリッドな世代だ。

福澤諭吉はそのような時代の節目に生きた変革の世代を、「一生に二生を生きる」と表現している。彼らは知識と体験が重なった本物の教養人だが、江戸末期から明治にかけての一般市民に至る日本人の品格がいかに高いものであったかは、渡辺京二の名著『逝きし世の面影』（平凡社ライブラリー）に詳しく書かれている。また、『ペリー艦隊日本遠征記』（万来舎）には、市井の人間から幕府の役人に至るまでの、当時の日本人を讃える言葉「忠実」、「勤勉」、「器用」などが数多く連ねられ、「将来この国が一等国になるのは間違いない」とまで書かれている。『ヨーロッパ人の見た幕末使節団』（講談社学術文庫）より、幕末の遣欧使節団に対するイギリスでの報道の一部をここに書き記してみよう。

「一行の驚くほどに物柔らかな挙措、礼儀正しさ……が、周囲の全員に強い感銘を与えた。（中略）実際、瞠目すべき一行全体の態度は、冷静沈着で、穏やかで、控えめで……どこに行っても人に尊敬の気持ちを起こさせる。言葉も通じず、知識や技術を披露したわけではない彼らが、初めて会う先進国の人たちにことごとく尊敬の念を抱かせるというのはどういうことだったのだろうか。知識を体験で知恵に変えた当時の日本人には、えもいわれぬ品格や風格があり、それは異文化を生きる人々にも通じる。つまり現代のグローバル社会でも色褪せない、日本人の教養ではなかったか。

江戸から明治にかけて花開いた日本の教養は、一九〇〇年（明治三三年）を境に、約五年ごとに英語で書かれた三冊の書物として世界をおどろかせる。

・内村鑑三『日本及び日本人』（のちに『代表的日本人』と改題）（原題 *Japan and Japanese*）――一八九四年
・新渡戸稲造『武士道』（原題 *Bushido*）――一九〇〇年
・岡倉天心『茶の本』（原題 *The Book of Tea*）――一九〇六年

いずれも見事な英文で書かれた、明治の日本を代表する名著だ。この三名

だから人は本を読む.pdf - Adobe Acrobat Reader DC

「さる有名な経営者の方から、面白いからぜひ読んでみたらと薦められた本が実に面白くて、アメリカへ行く飛行機の中でとりかかったら一晩で読んでしまいました」と。

その本は、坂本龍馬、西郷隆盛、高杉晋作、岩倉具視、大久保利通、中岡慎太郎、伊藤博文といった総勢四十六人の幕末の志士たちが勢ぞろいしている、真贋を問われるような一枚の古写真をモチーフに、明治維新の背後にあったある組織に言及していく内容である。そこで会うはずのない幕末の志士たちの集合写真は、なぜ可能だったのか。そもそも、この写真は本物か、合成か。興味深い話が展開していく。

私も面白く読んだ。推理仕立てのエンターテインメントといえるかもしれない。ここで、「そんなバカな話があるはずはない。ただの小説だろう」といってしまえばそれで終わりである。その人はこの面白さに出会えないのだ。

また、すでに私が持っていて、あまり本気で読まなかった本の価値を改めて教えられることもあった。

前述した『逝きし世の面影』（渡辺京二著、平凡社ライブラリー）という

本である。総務省系の地域創造という法人の林省吾理事長から読みましたかと問われて、一度は読んでいた手元の本を読み返しその価値に気づいたのだ。それからは、私もよく人に紹介するようになった。本は自分の成長の段階によって、理解できなかったり、理解しやすくなったりするものだ。

本は読み手によって、活かされ伝えられていく。良い本を探すだけでなく、それを伝え合える相手を持ってみるのもいいかもしれない。仕事後のわずかな時間に、「ところで面白い本を読みましたか?」と聞いてみるだけで、読書は厚みを帯びてくる。

老子・荘子に学ぶ人材の基軸

この本の第一章で、私は、孔子の『論語』は、教条的でなじめないと書いた。中学校で初めて習った時には理解できなかったからだろうと思い、その後、大人になって読み直してみたが、やはり私の気持ちにしっくり落ちてこない。その『論語』の言葉が、戦争や全体主義に利用されたことに対する反

もっと面白い本.pdf - Adobe Acrobat Reader DC

日米緒戦の流れを徹底的に変える。上巻では山本五十六というじつに魅力的な個性が光る。現代のアメリカ人からみても尊敬するべき人物像として描かれているのだ。そのマルスの如き山本五十六がミッドウェイ海戦で果たした役割とはなんだったのか、ここから読者は下巻最終章まで一気に引き込まれてゆくことになる。

山本提督が1本の糸だとしたら、アメリカ海軍のニミッツ提督やスプルーアンス提督はも う1本の糸だ。しかし、本書では提督たちだけでなく、敵艦に突っ込まざるをえなくなった日本人パイロットや、ろくな訓練も受けずにミッドウェイに投入された爆撃機のアメリカ人指揮官など、すべて実名で登場する。戦闘員たちもそれぞれ太さを変えながら1本の糸として描かれている。

それゆえに読者は、鳥瞰と仰視、ミクロとマクロ、個人と国家、作戦と戦略、の2点間を目まぐるしく行き来する著者の視点の動きを楽しむことができる。

本書はけっしてミリタリーマニアのための戦史書ではない。個別の戦闘の詳細を描きながらも、そこで行われた残虐行為や、そこに至る国家の思想や価値観なども描かれている。引用されている日本語の文章はすべて当時の軍隊記法のままなので、重厚で緊迫感が伝わってくる。訳はもちろん、使われている図版やソースノートなども丁寧で適切だ。

覗き見る民族の歴史

> 私はいま、日本近代を主人公とする長い物語の発端に立っている。物語はまず、ひとつの文明の滅亡から始まる。

古き日本人への追憶
『逝きし世の面影』
平凡社ライブラリー，
2005年，606頁

印象的なこの一行から始まる『逝きし世の面影』(渡辺京二著)は、日本民族誌の金字塔であろう。1998年に単行本で出版された本書はまもなく絶版になり、2005年に平凡社ライブラリーから再版された。以来、600ページを超える大部であるにもかかわらず

もっと面白い本.pdf - Adobe Acrobat Reader DC

１０万部を超えるベストセラーになっている。これからも世紀を超えて読み継がれる名著であることは間違いない。

本書は江戸末期から明治初期に来日した外国人の記録を丹念に収集し、項目別にまとめ、彼らの言葉で当時の日本を記述していくことに特徴がある。そこには現代人の江戸文化への憧れや、その逆の自虐史観などが入る余地がない。外国人たちも長い鎖国を経て開国したばかりの日本に入国したのだから、偏見や思い込みなどを持つ素地は少なく、淡々と事実を記述しているのだ。

６００ページあまりは１４章に分けられており、それぞれ「陽気な人びと」「親和と礼節」「雑多と充溢」「自由と身分」「子どもの楽園」「信仰と祭」など、じつに魅力的な章見出しが立てられている。

たとえば「第二章　陽気な人々」は、１８５９年、日米修好通商条約調印の翌年に、初代駐日英国公使として赴任したオールコックの言葉から記述が始まる。ときに辛辣に日本を批判したオールコックも〝日本人はいろいろな欠点を持っているとはいえ、幸福で気さくな、不満のない国民であるように思われる〟と書いているのだ。アメリカ人のペリーは第２回遠

征のさいに下田に立ち寄り〝人々は幸福で幸せそう〟だと感じている。

この章で証言している外国人はほかに、ティリー、ジョージ・スミス、オイレンブルク使節団、ヒューブナー、パーマー、イザベラ・バード、オズボーン、ボーヴォワル、リンダウ、ディクソン、メーチニコフ、クライトナー、アンベール、ブスケ、ブラック、ハイネ、コバルビアス(以下略)などじつに多彩であり、これらの外国人のすべてが異口同音に日本人がいかに陽気で幸せそうであるか、と記述しているのだ。

イザベラ・バードは明治１１年、当時外国人が足を踏み入れることのなかった東北地方を、馬で縦断したはじめての外国人女性である。その旅程中、宿に着いたとき、馬の革帯がひとつなくなっていた。〝もう暗くなっていたのに、その男はそれを探しに一里も引き返し、私が何銭か与えようとしたのを、目的地まですべての物をきちんと届けるのが自分の責任だと言って拒んだ〟ということに感動している。

さらにバードは山形の「手の子」という駅舎で、〝家の女たちは私が暑がっているのを見てしとやかに扇をとりだし、まるまる一時間も私を煽いでくれた。代金を尋ねるといらないと言い、何も受け取ろうとしなかった。……それだけではなく、彼女らは一包みのお菓子を

もっと面白い本.pdf - Adobe Acrobat Reader DC

差し出し、主人は扇に自分の名を書いて、私が受けとるよう言ってきかなかった(中略)私は彼らに、日本のことをおぼえているかぎりあなたたちを忘れることはないと心から告げて、彼らの親切にひどく心うたれながら出発した〃とある。

本書には全編にわたってこのような美しいエピソードが溢れており、まさに逝きし世の面影、日本が失ったかもしれない美しい日本文明について思いを馳せることができる。しかし、いっぽうで日本は本当にすべてを失ったのだろうか、という疑問、いやむしろ希望を感じることもできるのだ。

たとえば「子どもの楽園」という章だ。モースは〃私は日本が子供の天国であることをくりかえさざるを得ない。世界中で日本ほど、子供が親切に取り扱われ、そして子供のために深い注意が払われる国はない〃という。さらにモースは〃何か面白いことがあると、(父親は子供が)それが見えるように、肩の上に高くさし上げる〃光景を珍しげにかきとめている。まちがいなく現代の日本でもよく見られる光景であろう。

そして何よりも現代日本にも脈々と流れているのは日本の清潔さである。現代の東京へ来た外国人がもっとも驚くことの一つに道路の清潔さがあるという。ましてや公共施設でのト

イレのキレイさは自分たち日本人ですら驚くほどだ。この世界に比類なき清潔さは、逝きし世においても外国人たちは驚いたのである。

下田に到着したハリスは〃柿崎は小さくて貧寒な漁村であるが、住民の身なりはさっぱりしていて、態度は丁寧である。世界のあらゆる国で貧乏にいつも付き物になっている不潔さというものが、少しも見られない〃と記した。前述のオールコックは神奈川近郊の農村で〃破損している小屋や農家〃をほとんど見受けなかった。これは彼の前任地、すなわち〃あらゆる物が朽ちつつある中国〃に比べて、快い対照だったという。さらにオールコックは小田原から箱根に至る道路は〃他に比類のないほど美しい〃と記述しているのだ。

当時世界一周をしていたフランスのボーヴォワル伯爵は、〃ああ、あのように不潔、下品なあの中国を離れて間もない今、どんなに深い喜びの気持で日本への挨拶をすることであろうか〃といい、モラエスは〃支那に永らく住んで、その背景の単調、その沿岸の不毛、ピエル・ロティが『黄色の地獄』と言った、ヨーロッパ人がひどく厭う恐しく醜い人間の群が、汚い暮しをしているあの支那の部落の不潔を見慣れた者にとって、この日本との対照はまったく驚異に値するものだった〃と語っている。

バカにならない読書術.pdf - Adobe Acrobat Reader DC

専門化、細分化していった。その中で彼のような文化人類学的なアプローチをする人たちがもっとも意欲的に全体を把握しようとしていたでしょ。あれが最後だったかな。

養老　だから、いま読んでも古びてないんだ。それでいて自然観に目配りがきいているから、昆虫採集にも役立つ。これを読んでいるとつくづく思うのは、虫捕りに植物学者の人もいっしょに来てくれないかなということ。「この葉っぱ何？」と、その場で聞けるし。

池田　そうだよな。植物の人に聞くと便利だよ。

吉岡　海外から訪れたガイジンのまなざしを援用しながら日本近世の豊かな意味を探ったのが『逝きし世の面影』。幕末から明治にかけて旅行した外国人の多くが、日本と日本人の清潔さ、誇り高さ、笑いの多さ、柔軟性に驚き、べた褒めした。近代歴史学は、そんなのは皮相な観察に過ぎないと無視したけれど、著者の渡辺京二はそこから江戸期の生活世界を読み解いていく。たとえば「内分に済ます」という言葉があるでしょ。がんじがらめの権力世界ではそんなことはあり得ない。そこに西欧近代と日本近世の権力構造の相違を論じていく。スリリングな労作ですよ、これ。旅行記の読み方としても本当に面白い。

養老　開国後の日本に滞在したイギリス人の医者で初代駐日総領事のラザフォード・オールコックが『大君の都』で、将軍拝謁にきた庶民が物見遊山気分で騒いでいるのを見て、「こんな幸せな人たちは見たことがない。ここに西洋文明を持ち込むことは、果たしてこの人たちの幸せになるのか」と書いている。彼はアフリカを通り、インドを通って、しばらく中国に滞在した後に日本に来ていたから、日本社会の特異さをすぐに理解した。僕は学生時代にこれを読んで、マルキシズム歴史学が言っていることと全然違うじゃないか、と思った。戦後の歴史学にマルクス主義が与えた悪影響はすごいものがあるな。

吉岡　マルキシズムは近世を抑圧社会としてしかとらえないから。

池田　有名だけど面白くない旅行記が『ビーグル号航海記』。ダーウィンの名著と言われているんだけど、昔読んでも、いま読み返しても面白くない（笑）。もちろん意義ある内容だし、局所的に面白い個所もあるんだけど、無理して客観的に記述しようとしている感じが否めない。まあ、学術論文の続きみたいなんだ。ダーウィンと違って、動物地理学にもとづく進化論を構想した、博物学者のアルフレッド・R・ウォレスが書いた『マレー諸島――オランウータンと極楽鳥の土

吉岡忍の私のお勧め３冊

渡辺京二
「逝きし世の面影」
（平凡社ライブラリー）

イブン・バットゥータ
「大旅行記」（全８巻）
（平凡社東洋文庫）

戸井十月
「遥かなるゲバラの大地」
（新潮社）

仕事に効く！人生が変わる！すごい本。Ｉｎｄｅｘ.pdf - Adobe Acrobat Reader DC

日本史 補強のための6冊

『日本人と多文化主義』
石井米雄、山内昌之編／山川出版社／1995円
冬季五輪の開会式で、カナダは「我々は先住民族も含めた多民族国家だ」とアピールした。これは今、欧米先進国に共通する動き。日本も、アイヌと大和、琉球の多民族国家だ。

『天皇はなぜ生き残ったか』
本郷和人著／新潮新書／756円
日本中世史は難しい。それは「日本国家」が存在しなかったから。「将軍がいたのに、なぜ天皇は生き残ったのか」という大問題に挑む本書から、中世史のエッセンスを感じよう。

『英語襲来と日本人』
斎藤兆史著／講談社選書メチエ／1575円
とにかく面白い！ 江戸時代のフェートン号事件以来、日本人は英語学習に悩み続け、今に至る。日本人なのに英語は必修、日本史は基本的に選択科目。これも敗戦国の悲哀か。

『アイヌの昔話』
萱野 茂著／平凡社ライブラリー／918円
旅行に行く時に、目的地を舞台にした小説やエッセイを読む人は多い。アイヌの歴史を知らない人が北海道を訪れるなら、こんな本を鞄に忍ばせては。大人も癒やされる一冊。

『韓国併合』
海野福寿著／岩波新書／819円
今年は韓国併合100年目。在日韓国人への差別が残る一方、韓流ファンが増え、ビジネスでのつながりも多い今、韓国併合の過程は、社会人として押さえるべき常識なのでは。

『南蛮のパテレン』
松田毅一著／朝文社／3100円
こちらも面白い！ 日本経済と世界経済がつながった大航海時代の物語。ザビエルの本名が「フランシスコ・ジャッコア・アルビルクエルタ・イ・エチェベリーア」だと知り、妙に感動。

世界史 補強のための6冊

『後世への最大遺物 デンマルク国の話』
内村鑑三著／岩波文庫／525円
内村鑑三がデンマークの敗戦後の復興について語った時、日本は日露戦争の勝利の余韻に酔っていた。「戦争に勝って滅びた国は少なくない」という内村の懸念は当たっていた。

『検証 アメリカ500年の物語』
猿谷 要著／平凡社ライブラリー／1365円
「米国の歴史が簡単に分かる本はないか」とよく聞かれるが、ない。ただ、米国の折々の問題に焦点を当て、人々の肉声や統計数字を挙げつつ手際よくまとめた本書には、拍手。

『米欧回覧実記』（全5巻）
久米邦武編／岩波文庫／840～903円
明治政府が欧米に派遣した岩倉使節団の記録。団員には大久保利通、木戸孝允、伊藤博文など。彼らの受容能力の高さと、未知の土地を訪れる"わくわく感"が伝わってくる。

『サクサクわかる現代史』
青木裕司、片山まさゆき著／メディアファクトリー／756円
世界の国々を擬人化し、「地球高校世界組」の出来事として現代史を描いた漫画を、選者が解説。マージャンマンガで人気の片山まさゆき氏との共著。脚注にトリビア情報満載。

『国際連合 軌跡と展望』
明石 康著／岩波新書／735円
第2次大戦後の国際紛争の記述が多く、戦後史として読める。2001年の「9・11」後も扱う本書と、米ソ冷戦の中で書かれた前作『国際連合 その光と影』を読み比べてもいい。

『逝きし世の面影』
渡辺京二著／平凡社ライブラリー／1995円
明治維新前後に訪日した欧米人が見た日本人の姿が描かれる。「米欧回覧実記」と併せ読むと面白い。印象的なのは「子供が幸せそう」という感想。近代日本が失ったものとは何か。

今の日本は歴史ブームだと言われる。河合塾の人気世界史講師、青木裕司さんによれば、19世紀初頭のヨーロッパにも世界史ブームがあった。「理性が導く明るい未来を信じて展開されたフランス革命が、ナポレオンの敗北とともに挫折。閉塞感が漂う中、人々は過去の歴史に未来の指標を求めた」。

閉塞感は今の日本も同じ。歴史の中に答えはあるのか。

「19世紀のヨーロッパの歴史学には、自国、自民族の優越を説く偏狭さが目立った。批判精神と事実の検証が欠如した歴史の探究は、浅薄な過去の賛美に終わる」（青木さん）。

翻って、現在の坂本龍馬ブーム。龍馬の人気は、司馬遼太郎の小説に拠るところが大きい。

だが、「小説としての魅力はさておき、当時の経済状況など、史実について著者の記述を鵜呑みにすると認識を誤る」と、河合塾の人気日本史講師、石川晶康さんは警告する。

とはいえ、一般のビジネスパーソンに史実を確認する余裕はない。だからこそ本の読み方が偏っていないか、気をつけたい。ただでさえ歴史ファンの関心は、戦国時代や幕末など日本史の一時期に集中しやすい。

石川さんのセレクションは、様々な時代、地域にバランスよく目配りしたもの。対して、青木さんは、世界史の基礎知識が乏しい人でも興味が持てるよう、「心揺さぶられる本」に重点を置いた。まずは1冊、手に取ってほしい。

教養編

仕事で成果を出し、お金を稼ぐのは人生の一部に過ぎない。
日々の生活を深く味わい、人生を充実させるのに役立つのが教養だ。
冷静に歴史を振り返り、先人の残した美しい言葉と芸術を堪能しよう。

カリスマ予備校講師が警告する
ブームの落とし穴

歴史

日本史・世界史 必読の6冊

▼世界史

『夜と霧 新版』
V・E・フランクル著／みすず書房／1575円
ユダヤ人の精神医学者である著者による、アウシュビッツ強制収容所での生活の記録。「絶えざる死の危険のもと」にある収監者たちの間で交わされるユーモアなどを、驚くほど冷静な筆致で淡々と描く。

『人は愛するに足り、真心は信じるに足る』
中村 哲、澤地久枝著／岩波書店／1995円
アフガンの歴史は、近現代史における国際対立の縮図。この地で20年以上、医療・農業支援活動に取り組む日本人医師とドキュメンタリー作家の対談集。心動かされる。

『ルネサンスの歴史』（上下巻）
モンタネッリ／ジェルヴァーゾ著、藤沢道郎訳／中公文庫／上巻=700円、下巻＝840円
聖徳太子は日本人ではない。当時、日本はなかったから。日本国家の成立を知らずに日本史を学ぶのは、連続ドラマの最初3回を見逃したのと同じ。大津透氏の『日本古代史を学ぶ』の第Ⅲ部もお薦め。

▼日本史

『日本の誕生』
吉田 孝著／岩波新書／777円
聖徳太子は日本人ではない。当時、日本はなかったから。日本国家の成立を知らずに日本史を学ぶのは、連続ドラマの最初3回を見逃したのと同じ。大津透氏の『日本古代史を学ぶ』の第Ⅲ部もお薦め。

『もういちど読む山川日本史』
五味文彦、鳥海 靖編／山川出版社／1575円
今の学問水準で満遍なく日本史を押さえた本。要は高校の教科書だが、「聖徳太子」が「厩戸皇子」になっていたり、昔の教科書との違いが分かると面白い。退屈に感じる人はコラムだけでも読んでは。

『それでも、日本人は「戦争」を選んだ』
加藤陽子著／朝日出版社／1785円
「『平和がいい』と唱えれば平和になるのか」という現代人の素朴な疑問を突き、昨年来、話題騒然の一冊。「生産経済あるところ、戦争は必ずある」のは、歴史学の常識。

この人に問いた

青木裕司さん
Hiroshi Aoki
河合塾専任講師（世界史）
九州大学文学部卒業。1985年から、河合塾で世界史を教える。『青木世界史B講義の実況中継』シリーズ（語学春秋社）、『知識ゼロからの現代史入門』（幻冬舎）など著書多数。

石川晶康さん
Akiyasu Ishikawa
河合塾講師（日本史）
國學院大学大学院博士課程満期退学。専門は日本法制史・古文書学。『石川日本史B講義の実況中継』シリーズ（語学春秋社）、『日本史の考え方』（講談社現代新書）など著書多数。

INDEX

01 歴史 ―― 054
02 アート ―― 056
03 哲学・思想 ―― 057

深堀り書評
写真／地図／動物園／時間／紙／統計／武士道／大人の絵本／ガンダム

読むことの力―東大駒場連続講義.pdf - Adobe Acrobat Reader DC

（右）写真③　（左）写真④

を旅する人びと』、『中世賤民の宇宙』などご専門のドイツ中世史から、今まで学問の対象にならなかった日本の世間というものを書かれた「世間論」、近代日本の教養とは何だったのかを考察された『教養とは何か』など、常に何故、学問をするのかという根底のところで思考され、書いておられます。

全集の装丁を考える場合は、著者のそれまでに刊行されたいろいろな本がほとんど入るわけですから、一冊だけの特定のイメージで考えることはしません。具象的なもので意味がつきすぎないよう、あまり装丁自体が邪魔にならないよう、しかし全体としては、著者となにかしら結び目があるような装丁にしたいと考えます。

著作集の函ケースは貼函でモコという紙を使い、タイトルの下の部分には、フィレンツェのヴェッキオ橋を渡ったところにある古くからの文具店「ジャンニーニ」で買ったマーブル紙を使いました。美しい色合いのマーブル紙を少量使うことで黒い楕円の中のタイトルをより際立たせようと思いました。表紙はこげ茶に近いクロスで、阿部先生の頭文字Aを〈カラ型押し〉にして、背文字は消金（マットな金）で入れています。

◉『逝きし世の面影』渡辺京二著（葦書房刊）A5判、上製、写真④。

幕末明治の外国人訪日記を調べなおし、そこから見えてくる近代日本が滅亡させたものの意味を問うた本です。明治九（一八七六）年、パリのギメ博物館の創設者エミール・ギメの訪日に同行した画家フェリクス・レガメが描いた「江ノ島の茶屋の女」をゲラで見た瞬間、このふくよかで優雅な女の人の絵をなんとかカバーに入れたいと思いました。また、別紙大扉には、背に刺青をした精悍な人夫の絵を入れました。

◉『黒い肺』沢田猛著（未来社刊）四六判、上製、写真⑤。

日本の近代を支えた石炭産業、その知られざる職業病・じん肺の実態と裁判を追ったルポルタージュです。

著者の沢田さんは、装丁の打ち合せでお会いした時、ある見慣れないものを風呂敷包みからとり出されました。それは、じん肺で亡くなられた方の解剖された肺を、スライスにして透明なプラスティックで固めたものでした。その肺には、細かいレース状の気孔のようなものがあり、粉じんが溜まったところは黒くふちどられ、全体はベージュ色をしていました。

榊原式スピード思考力.pdf - Adobe Acrobat Reader DC

たとえば現在、地球の年齢は四十億歳とか、五十億歳といわれています。それが受け入れられているのは否定するような証拠が出ていないからで、何か新しい証拠が出ればいくらでも変わってしまうでしょう。

それは、理系の自然科学の話だけではありません。かつて江戸時代の農村といえば、民衆が貧しい暮らしをしていた時代と思われていました。しかし最近の研究では、自治のシステムが整い、比較的平等な富の分配が行なわれ、**貧富の差があまりない経済的に豊かな社会**であったことがわかっています。

とくに江戸時代から明治初期にかけて来日した外国人の目を通して当時の社会を描いた、渡辺京二さんの『逝きし世の面影』（葦書房）という本では、欧米人が当時の民衆の生活を見て「衣食住が豊かである」という証言を多くしていることを指摘しています。

新しい論拠が出てくれば、定説というのはいくらでも変わるのです。

教科書に載せられているような科学的真実というものも、往々にして、実は暫定的なものに過ぎません。どのような命題も、今は絶対的真理だと思えても「いまのところ、間違いないように見える」とか、「法律的には、現在はこっちが正しい」とか、「多数の人が現在はこちらを採用している」という暫定的なものなのです。

そうすると私たちは、科学的な真実にしろ、一般的に「正しい」と受け止められていることにしろ、常に〝検証する〟という態度をもっていなくてはなりません。

しかし検証する前に重要なのは、やはり何度もいうように「それを疑いの目をもって見られるか」ということ。同質性が高く**多数の意見が絶対的なものになりやすい日本**で、〝常識となっていることに疑問をもつ〟ということは難しいかもしれませんがどうしても必要なことなのです。

日本近世の起源―戦国乱世から徳川の平和（パックス・トクガワーナ）へ.pdf - Adobe Acrobat Reader DC

新書版のためのあとがき

戦後の日本史研究には強いイデオロギー性がまといついている。マルクス主義史学の退潮いちじるしい今日でも、その点ではあまり変りがない。これは敗戦以来、「日本」というものをどうとらえたらよいのか、一種の悪夢ともいうべき存在不安から「知識人」が逃れられないからだろう。私はそういう「知識人」の自己証明的強迫観念を脱色した歴史を書きたかった。日本、日本とこだわることは何もないのである。

小川哲生さんがこの本を装い新たに復刊してくださる。重ね重ねのご好意にどう応えたらよいのか。私の旧著はこれで八冊が復刊されることになる。たいして売れなかった本ばかりだが、してみると多少の存在理由はあったというわけか。もって瞑すべしというのはこのことだろう。

二〇〇八年五月

著者識

解説　戦後史学の左翼観念性を克服する「渡辺史学」の傑作

三浦小太郎

渡辺京二は現代日本の知の巨人の一人である。約三十年にわたる思索の数々を集成した『渡辺京二評論集成』、宮崎滔天、北一輝等の評伝集、そして、江戸時代への視点を一変させた『逝きし世の面影』まで、著者は一貫して、日本近代史を人類史全体の中に位置づけ、私たちが西欧近代との出会いと受容の中で何を失い、何を得たかという根源的な問題点を見つめ続けてきた。本書と『逝きし世の面影』は、ひとつながりの連作と読まれるべき、「渡辺史学」の傑作である。

日本中世社会「乱世」は、網野善彦を初めとする日本アナール学派ともいうべき史家たちにより、江戸時代とは全く違う「自由」が溢れていた時代として再評価されてきた。しかし、網野的史観が、戦後左翼の単純な自由礼賛・反権力思考による錯誤である事を、本書ほど明らかにしたものはない。

本書第二章「乱暴狼藉の実相」によれば、戦国時代の戦争は、非戦闘員の「捕獲」と、捕虜の人身売買を伴っていた。「捕虜はそれを捕獲した兵士の分捕り分である。二束三文で捕虜をたた

日本近世の起源―戦国乱世から徳川の平和（パックス・トクガワーナ）へ.pdf - Adobe Acrobat Reader DC

き売ったのは、その所有者たる雑兵たちだったのだ」。この「雑兵」の実体は農民であり、中世期の民衆は戦争への「能動的参加者」だったのである。捕虜は奴隷として売られ、当時来航していたポルトガル船に「輸出」されたものすらいた。戦場の掠奪・放火・破壊行為は激しく、民衆自身が率先して行った。勿論現在の視点からこれを道徳的に指弾することは無意味である。だが、「戦乱に伴う暴行は支配者・被支配者が矛盾・対立を含みながら一体となって作り出した『乱世』的現象であった。この乱世が新しい秩序を生み出すための陣痛であったとしても、ひとはそのような状態に安住することはできない。乱世は誰かが終息させねばならなかったのである」と描く時、渡辺は戦乱の中で踏みにじられる人々の悲しき生に目をむけ、中世の「自由」の本質的な問題点に触れている。

さらに、第四章「山論・水論の界域」第五章「自力救済の世界」で明らかにされるように、日本中世社会は、まるで現代の「新自由主義」をさらに推し進めたような、徹底的な「自力救済原理」「当事者原理」に貫かれていた。しかも、そこには現代の「法治」も「個人」の概念もない。武装した農村が互いに用水や山林の権益を巡って衝突し、敵対する相手には暴力的に攻撃を加えても罪とされないのが、中世農村の「自律」だった。また、中世の法制度は、「訴えがあれば取りあげぬわけにはゆかぬけれども、もともとは殺すのも殺されるのも当人の責任で政府は関知しない」という「当事者主義」に根ざしていた。これは「各種各級の裁判権が並立」「守護・地頭は勿論、惣村までが死刑を含む裁判権を保有」し、日本全体を司る「公権力」が解体していた時

代の必然的な姿なのである。だからこそ、人々は自らの生を守るためにも、惣村を初めとする共同体に属し、その保護を受け、さらに共同体の利益を守るためには生死をかけて戦わざるを得なかった。

網野善彦は、このような共同体を脱出した人々が、寺社、楽市、そして自由都市等で、一切の社会的束縛から解放されて自由に生きる空間「無縁」社会が存在した事を、中世社会のダイナミズムとして魅力的に描き出した。しかし、本書第六章「中世の自由とは何か」にて、渡辺は網野の説く「無縁」とは、戦後左翼的なアナーキズム共同体幻想に過ぎないことを完膚なきまでに暴露している。網野が「自由な空間」と見たものは、各共同体・集団の武装衝突が激発する中で、犯罪者が復讐を恐れて逃げ込む「縁切り寺」であり「商売のために手打ちして生まれた休戦地域」としての「楽市」であり、大商人に寡頭支配され、針鼠の様に武装した「自由都市」に過ぎなかったのだ。

同時に渡辺は、この社会を不当に貶めてはいない。「主権的集団である武士団や町村が入り乱れて己の固有の権利を主張して戦う中世的光景は、苛烈な情況の中で放射される生の輝きという点では、ある種の魅力をたたえている」（一三六頁）。確かに、本書で描かれる中世社会は、網野のそれを遙かに越えた激烈な魅力を湛えた、ブルクハルトが『イタリア・ルネッサンスの世界』で描き出したような、人間の生が一切の偽善を越えて光り輝く世界である。そして、渡辺は中世の「自由」とは、近代的な自由の概念や平等思想とは無縁の、むしろ主従関係、上下関係と矛盾

日本近世の起源―戦国乱世から徳川の平和（パックス・トクガワーナ）へ.pdf - Adobe Acrobat Reader DC

することなく両立するものだった事を明らかにする。中世に於ける「仕え甲斐のある主人」とは「この人についてゆけば近隣に覇を唱えることができる、さらには歩を進めて天下を取ることができると期待できる主人」であり、このような武将としての力量と共に、従者への公的な慈悲心と、私的な情愛関係を持ちうるような主人に対し、自立した従者として、自らの尊厳をかけて仕え奮闘する事が、主人と従者の暗黙の合意関係だったのだ。こう書くとき、渡辺は、日本の最も優れた政治運動家であり「この人に天下を取らせたい」と思わせずにはいられない魅力を備えていた谷川雁との若き日の出会いを重ね合わせているかのように思える。

そして、ルターの宗教改革がルネッサンスの中から現れたように、鎌倉仏教、特に親鸞の浄土真宗が日本中世に出現する。親鸞の思想は、人間には徹底して救いがないことをまず原点にする。これは、貧苦や病苦、老いや死をまぬがれないなどといった一般論的な教えではない。この乱世では、人々は常に加害者であり、同時に被害者ともなりえたという、乱世の現実を宗教者、思想家として引き受けたところからうまれた。このような時代に人間が救済されることはありえない。そして、「絶望のないところに救済の要請があるはずはない。救われぬからこそ救われねばならぬのである。他力とはこのこと以外を意味しない」という「特異な救済の自覚」が導き出された。

そして渡辺は、親鸞にとって、救済の象徴である阿弥陀仏は「かならずや、山河の姿をとって（中略）また、人間の生きる姿の悲しさとして現れただろうと信じる」と書く。宗教者として、この世の人間に絶望しか見出せなくなった時にこそ、初めて神を見ることができる。それは修行や

教学など「自力」で見出す事のできる神でも悟りでもない。そのような全ての行為が無意味と知った時、初めて宗教者と非宗教者の壁は取り払われ、山河に、また、絶望の淵で「乱世」を生き抜くしかない人々の苛烈な生にやどる悲しみのなかに、真の意味での救いも信も現れるのだ。ここでの親鸞理解は、かつて渡辺が水俣病闘争に参加し、そこで見出した「もうひとつのこの世」（石牟礼道子）、水俣病患者たちが、人間への絶望を経た上で幻視したユートピアを思想的に受け止めた様々な論考を思い起こさせる。そして、吉本隆明に深い敬意を払い、彼の親鸞論に影響を受けつつも、あくまで「思想家」親鸞の、修行や教学を否定し既存の宗教を解体してゆく姿勢を評価する、最も優れた意味に於ける近代的な自立思想家としての吉本に対し、最終的に「救済」を求める宗教者としての親鸞を救い出そうとする所に、吉本と渡辺の思想的な分岐点が現れているとも言えるだろう。同時に、親鸞の思想が、教団によって変質され、組織化されてゆく中で、教団が政治権力化し、最後には宗徒を教団の利益のために戦争に駆り立てる過程への厳しい批判は、一向一揆に関する「農民戦争」「信仰を守るための戦い」などという俗説を克明に論破すると共に、現代社会の宗教によるテロリズム批判にも及び、また思想的にはニーチェによるキリスト教批判に通じる原理的な宗教批判ともなりえている。

そして、渡辺が日本的近代の一つの達成として描き出した江戸時代「パックス・トクガワーナ」の社会は、このような乱世に法的秩序をもたらし、しかも中世に確立した村落共同体自治の原則を守りながら、共同体同士の武装対決を公的権力が禁止し、平和と経済的繁栄を実現した、西欧

日本近世の起源―戦国乱世から徳川の平和（パックス・トクガワーナ）へ.pdf - Adobe Acrobat Reader DC

とは全く異なる「日本的近代社会」であった。この社会が、幕末・明治初期に訪日した外国人の目から見てどれだけ魅力的なユートピアに映ったかを検証し、江戸時代の本質を明らかにしたのが、『逝きし世の面影』である。西欧近代だけが近代のあり方ではない、というマイケル・ポランニーや文化人類学者の問題提起に対して、日本の歴史の中にその明らかな答えが具現化されているのだ。

渡辺のこの歴史観は、前述した様々な思想家のみならず、ドストエフスキーやソルジェニーツイン、シモーヌ・ヴェイユなど、西欧近代を民衆意識の最も根源から乗り越えようとする多くの思想的巨人の姿とも酷似している。この視点が、水俣病患者闘争という、戦後日本において近代的市民社会と前近代的民衆の価値観が最深部で激突した地点から生み出されてきた事を思う時、私たちは本書が単なる日本中世論を超えた現在的問題に深く繋がっている事を再確認せざるを得ない。そのとき私たちは、今新たな「乱世」に、思想的にも実践的にも直面しているのではないかという戦慄と共に、この時代には「絶望からの救済」が何よりも必要なのだという著者の荒野に呼ばわる声が聞こえてこないだろうか。

（みうら・こたろう　評論家）

きみと地球を幸せにする方法.pdf - Adobe Acrobat Reader DC

誇張された形で持っている」。さらに、「奇妙な論理の混乱により、われわれは普通この事実を無視し、成体の形のほうが幼児の形よりも高度に発達していると考える」。興味深いのは次の指摘だ。「類人猿はかなりの程度までヒトの資質を持って生まれてくるが、成長に伴いヒトから遠く隔たるようになる。ヒトは、さらに大きなヒトとしての、または超ヒト的な資質を持って生まれ、成人になると多少それからはずれ、徐々に類人猿に近づく」[★21]。つまりヒトの赤ちゃんにはとてつもない可能性が備わっているということである。それはいったい何か。もしかしてそれこそS・キューブリックが「2001年宇宙の旅」のラストで描こうとしたムーンチャイルドではなかったか。

「2001年宇宙の旅」のムーンチャイルド

幼児化は種の社会的行動に大きな影響を与えてきたが、それはマゾヒズムや同性愛やロリコンのようなあまり普通とは思われていない性行動へと人を誘うことになる。そうなるとシロアリやハダカデバネズミのように、いつしか大部分の個体はまったく繁殖できなくなるだろう。それを必然と考えるかどうか。

15日本人は「幼児性」を愛する

現在、日本でよく問題にされる若い男性の草食化の問題も、このことと無縁ではなかろう。日本が諸外国から注目されるのは、以前のように先進工業国として世界のトップを走るというイメージからではなく、いまやマンガ、アニメ、幼児的なファッションによるところが大きくなっている。AKB48のステージなどその代表で、かつては欧米から幼児的とバカにされていたが、いまやその影響は世界中に広まっている。キーワードは「かわいい」という言葉。もともと日本にはそうした土壌があって、東アジアの儒教文化圏の国々とはやや異なる特性を持っていたことは、サミュエル・ハンティントンが『文明の衝突』（一九九六年）で明らかにしたところである。

たとえば、次のエピソードをご覧になっていただきたい。渡辺京二『逝きし世の面影』（一九九八年）は幕末から明治にかけて日本を訪れた多くの外国人の日本に対する印象を集めた

きみと地球を幸せにする方法.pdf - Adobe Acrobat Reader DC

ものでも名著の誉れも高い。そこにアメリカの作家W・ディクソンによる報告が引用されている。

東京のいたるところに人力車夫の溜り場があり、四、五人から一ダースほどの車夫が待機している。客をめぐって口論するかわりに、長さのちがう紐の束を用いてくじを引くのが彼らのやり方だ。客になりそうなのが近づいて来るのが見えると、彼らはそれをやる。お目当ての人物が初めから乗る気などなくて通り過ぎてしまうと、当りくじを引いていた気の毒な車夫に向って笑い声が起る。その当人も嬉しそうに笑っているのだ。[22]

普通ならば、他のどの国でもあるように、みんなが争って客のまわりに駆けつけてくるものだが、なんという智恵であろうか。このようなことはつい一〇〇年くらい前までは当たり前に通用していたのであって、当時日本を訪れた外国人はみんな口をそろえて人々のおおらかさと屈託のなさを絶賛したものである。われわれの過去にもそのようなゆるやかなコミュニティは至るところに見出すことができたのである。

イギリスの外交官ローレンス・オリファントは、日本を訪れたのちに母に書いた手紙のなかで次のように書いている。「日本人は私がこれまで会った中で、もっとも好感のもてる国民で、日本は貧しさや物乞いのまったくない唯一の国です。私はどんな地位であろうともシナへ行くのはごめんですが、日本なら喜んで出かけます」というほどの日本びいきになっていた。渡辺はそれにコメントして、「それまでセイロン、エジプト、ネパール、ロシア、中国など異国について豊かな見聞をもち、そのいくつかについては旅行記ものにしてきたこの二九歳の英国人が、快いくるめきにも似た感動をたっぷりと味わっていることだけはよく伝わってくる」と付け加えている。[23] 多くの外国人が「この国民は満足していて幸福だ」と書いている。もともと日本人は争いごとの嫌いな融和的な国民性を持っていたのである。それも幼児性の一つの表れかもしれない。

一九六〇年代の高度経済成長の時期を経て、日本も大きく変貌を遂げてきた。アメリカの心理学者バリー・シュワルツは次のように書いている。「四十年前に比べて、アメリカ人の平均所得は倍以上に増えた（インフレ調整後）。皿洗い機の普及率は、9％から50％に増えた。乾燥機の普及率は20％から70％に、エアコンの普及率は15％から73％に増えている。これに比例して、幸福な人間も増えただろうか？　とんでもない。さらに劇的だったのは日本の例だ。四十年前に比べて国民一人当たりの所得は五倍に増えたが、個人の幸福感の水準は、ど

きみと地球を幸せにする方法.pdf - Adobe Acrobat Reader DC

うみても上昇はしていない[★21]」。

たしかにそのとおりだろう。では、お金ではなくていったい何が幸福感の指標になるのか。一九六〇年代以降、いったんは個人主義の時代がやってきたことを礼讃し、これまでの親戚づきあいや近所づきあいを煩わしいものとして退け、快適で近代的な個人中心の生き方が追求されてきたのだが、なんとしたことか、そうなるにつれて幸福感はどんどん下降を続けてきたのだった。そして、人と人との距離が遠ざかる一方になって、もはや元には戻らないかに思えたところ、近年、カウチサーフィンやシェアハウスのように、アカの他人と家族のような結びつきを求めるサイトが数多く開かれるようになってきた。これからの世界はまた大きく変わろうとしている。日本人の心にはもともと見知らぬ他人が困っていたら助けてあげたいというメンタリティが深く根を下ろしている。そうした伝統はそう簡単に失われることはないのである。

第四章

歓待する人々